

# 一億分の一の幸せの道——一九六七

伊藤 昭一

大学の広く妙に暗い教室の片隅。経済部第二経済学  
科の学生、青木和也はそこにいた。ひとときわ高い壇上  
の教授の顔は見えない。彼の机には、著者の異なるマ  
ルクス経済学論を何冊も積み上げられ、講義をしている。

「……………作った背広は、自分だけの使用に限ってい  
れば、その価値は使用価値のみである。それを、余分に  
もう一着つくり、他人の持つカバンと交換しようとする  
とき、交換価値の概念が生まれる。交換価値はそれ  
自身では価値の大きさを表現できない。ある場合はカ  
バンの持ち主を相手との交渉をしてのみ、その交換す  
るための価値を表現できるのである。これはしかし、  
どこか不便である。もし交換価値そのものを表現する  
物（貨幣）があれば、自由に交換ができる。ただし、  
貨幣はみんながその価値を信じるという要件をもつ。  
それが信用である……信用さえあれば、それは紙切れ  
でも、貝殻でも、石でも価値の表現である貨幣として  
通用するのである……」

夜の十時過ぎ、授業を終えた和也は、帰宅のため飯  
田橋駅から電車で秋葉原に向かう。電車が水道橋駅に  
着くと、ホームに溢れていた人々が、どつとなだれこ  
んでくる。後楽園で野球のナイターを見物していた客  
たちだ。

満員となった電車は人いきれで蒸し暑い。「ナガシマ  
がなあ、オーがよう……」と野球談議が聞こえる。背中  
からは、女らしい柔らかな尻が押しつけられてくる。

くそつ、こいつら民衆は、生活を楽しんでる。こ  
んなことで、勃起してしまっているおれだが、やはり  
民衆の一人なのだ。眠いのを我慢して勉強に励んでい  
るのに……。民衆のためにか、自分のためにか、学問  
をするのに何の意味があるのだ。和也は息苦しさに向  
めいた。電車がトンネルに入り、人々が急に消えた。  
すると暗闇から突然、女が現れた。ぼさぼさの艶の  
ない髪、むくんだ顔に荒れた肌、眼だけが濡れて光つ  
ている。

「あんたマル学同は解体したのよ。中核派で共闘しな

い？ でもね、わたしさあ、男と関係するとさあ、あとで自己嫌悪になっちゃうんだよね」

女は肺に吸いこんだハイライトの煙を、和也の顔に吹きかけた。

「なにをばかなー。おまえと寝たら、誰でも自己嫌悪に陥るさ」

とたんにゲバ棒が飛んできて、彼を打ちのめした。

倒れた彼を抱き起こしたのは、艶やかな髪の白い肌をした全裸の女だった。

「あなた、六〇年安保のとき、どうしてた？ わたしは共産主義者同盟・ブントよ。よかったわね、あの頃は革命的だったわ」

彼女の白い手がしきりに彼を愛撫する。彼の欲望が突然湧きあがり、たちまち陶然とし、うめき声をあげた。

彼は布団の中で、目覚めた。夢だった。だが、後頭部にしびれたような名残りがある。射精したことは、現実だった。時計を見ると、午前五時だ。

「ちえっ。もう少しましな夢を見させろよ。余ったから出しやいってもんじゃないだろう」

和也は、ひとりごとを言いながら、脱いだパンツの汚れない部分で、ペニスを拭いた。下着を替えると

また布団にもぐり込んだ。すぐ、眠りに落ちた。

☆

配達の仕事をすませて、日本橋二丁目のアルバイト先の会社に戻ってきた青木和也。自分の机の席でひと息ついてみると、社長の河村周三が、待つてましたとばかりに、声を掛けてきた。

「きのうは君、日本棋院の講座は行ったんだろ。来たまえ。ちよっと、その成果をみてやろう」

紙巻きタバコをつなげたパイプを口に横くわえ、部屋の隅に置いてある碁盤を指差した。河村社長は六十五歳。馬面で頬にイボが浮き、こめかみにシミが出ている。今日は上機嫌で頬をゆるませている。

「はあ、昨日が講座の最終日でしたよ」

和也は、気の進まないまま、しつらえられた碁盤セットの前に座った。黒石を持ち、碁盤に九目を置いた。

和也はこの河村社長の命令で、日本棋院の『初心者囲碁三日間講習』に通ったのである。河村社長は、雇ったアルバイト学生のだれかれとなく囲碁を教え、自分の手をさせるのが好きであった。

雇われたばかりの和也にも目をつけた。

「君は碁の好きになる顔をしているよ。ちょうど、初心者講習会がある。夕方四時から五時までだ。それから学校に行っても、授業に間にあうだろう」

そう言つて、一日千円の囲碁の受講料を三日分、財布から出してくれたのである。

そのとき脇から口をはさんだのが、成山浩二専務であつた

「なんですか、社長。青木君は、先月採用したばかりですよ。仕事もろくに教えていないのに、囲碁を覚えさせて、どうするんです」

和也を面接して採用を決めたのは、この成山専務である。三十四歳の専務で、色が白く整つた顔立ちをしているが、神経質そうである。だが、しつかりとした顎が意志の強そうな印象を与えている。実質的には、社長は彼を後継者に決めているらしく、経営はこの成山専務が仕切つていた。

「いいじゃないか。ほかの連中は覚えがわるいのか、才能がないのかダメなんだよ。青木君はモノになりそうな顔をしておる」

社長はにやにやしながら、パイプの煙をくゆらしたものだ。

成山専務は、額に掌をあてて、はあつと大きな溜息

をした。

「しようがないな……。君、くれぐれも言つておくけれど、うちの会社のすべてがこの調子ではないんだぜ。

とにかく囲碁の講習には、行ってきなさい」

こうして彼は三日間、午後四時前には仕事を終わらせ、会社から五分ほどのところにある日本棋院の道場に通つた。それから市ヶ谷にある日大学の門をくぐるのだ。

☆

一九六六年の七月。青木和也は二十三歳であつた。

『印刷工および配達員求む／夜間通学可』という新聞広告をみてこの会社に来たのだつた。

社名は「家電新聞社」といつて、社員十名、アルバイト五名の業界専門新聞社だつた。事務所は東京駅八重洲口に遠くない日本橋二丁目。雑居ビルの四階である。

事務所には河村社長と秘書、成山専務、藤井取締役編集長の机が奥にあり、さらに窓際に四つ、中央に二つがくつつけて並んでいる。そのほかに小型印刷機や、積み重ねられた用紙の束などが置かれ、とにかく窮屈

だ。通路はお互いにすり抜け合わない、通れないくらいだ。

会社の発行物は「週刊家電」という新聞で、これが主体となっていた。しかし、同業に日刊新聞で宅配もする「電界新聞」という大手があり、これに押されて衰退気味であった。

そこでもうひとつ、大手家電メーカーだけに特別に情報を守る販売限定版の日刊「家電特報」を発行している。これが家電メーカーの社員教育用に好評で、収益の七割をしめていた。

アルバイト学生はこの日刊「家電特報」の印刷と、その配達のためにだけ雇われていた。週刊新聞の編集は、夜間大学生もふくめて、すべて社員扱いの者だけで、別組織になっていた。で、週刊新聞の記者になれると思つて勤めはじめた者は、そこが関係のない部署だと知ると辞めていった。

和也は経済学者志望で、夜間大学に通うのを優先する。印刷と配達だけで、五時に退けるといふこのアルバイトに不満はなかった。配達先は二十ヶ所もあるので、アルバイト学生は四、五ヶ所ずつ手分けして廻る。

和也の場合は、朝八時半に出勤し、午前十時まで簡

易印刷機を動かす。十時半ごろ出来上がった通信を会社別に仕分けして、ショルダーバッグに入れる。自分の担当する場所に配達に出るのだ。

最初は、有楽町数寄屋橋の東都電気。阪急ビルのなかにあった。つぎは水道橋に出て都電をつかう。白山上駅でおりてカーステレオメーカーのコーラルトン社事務所にゆく。それからまた都電に乗って巣鴨駅に出る。巣鴨から板橋駅に行く。板橋の駅の近くには、アテナメーカーの横江製作所があった。これだけ一気にまわると時刻は十二時半か一時になっている。これで一日の配達仕事はおわりである。あとは会社に戻るだけだ。

和也は板橋駅前のソバ屋にはいつて、カツ丼を食べる。食べ終わると、板橋駅のホームのベンチに座り、貨物線に入つて来る蒸気機関車を眺めながら一服するのである。経済学の本を開いて読むこともある。もう常磐線でも電車になっている。都内でSLが観られるのは、ここだけだろう。歴史的にみれば、英国産業革命の主役の子孫がここに生き残っているのは、皮肉だ。彼の大学の専攻はマルクス経済学であった。その理論を授業だけで学ぶのは不可能である。専攻の教授も言っていた。「大学ではね、専門的には自分で学んで、

新しい理論を自ら作り出すところなのだ。それも二十代前半のうちに、だよ」と。

シュンペイターやケインズなどは、二十四、五歳で理論を完成させ、その後は自分の学説の解説で人生を費やすに過ぎないのだという。そういう話が授業の主な内容であった。

学者になるには、在学中に資本論の新解釈を生み出す糸口を探しておかないと具合がわるいことになる。和也は焦っていた。百年前のマルクスの資本論が現在までそのまま当てはまるとはおもえなかった。

彼は現代社会の経済状況と「資本論」の示された社会形態のちがいを、理論化しようと思っていた。これは、高校生の時に、社会科の教師に指導を受けた影響であった。

すでに、マルクスの資本論に提示されたイギリス資本主義社会の分析データと、そこで示された論理が整合していないことを、発見していた。それを卒業論文の主題することを決めていた。

このような理論の研究は、長く考えていても、頭が堂々巡りするだけで、少し考えては気分を変えて、また考えるのが良い、というのは少しずつわかってきていた。

そのとき、ひらめいた考えた問題点をノートに記すと、それでその時間の作業をやめる。あとは、ぶらぶらするという気分です。山手線に乗換え東京駅に戻るのである。東京駅では、南口にある待合室で、座席に落ちていた新聞を読んだり、大学の教科書を読んだり、時には居眠りをしたりする。

昨日の午後などはぐっすり眠り込んでしまった。そのとき、成山専務に肩をたたかれ、起こされた。成山はたまたま丸ノ内の三菱電機に営業に行き、通りかかったのである。

「君は、見かけによらず野放図な奴だな」と笑い、怒りもしなかった。

東京駅の丸ノ内側から八重洲通りまでは、歩いて十分はかかる。その道すがら専務は、和也の配達先のメーカーから、日報の届くのが早くなったと褒められていと教えてくれた。そして、こう言ったのである。

「これはだね。ぼくがあるメーカーのやり手といわれている課長から聞いたんだけどね。新しい仕事の担当になったら、仕事の内容が同じでも、できるかぎり前任者と違う手法でやるように心がけるんだそうだな。

すると、あいつが担当したら何かが変わったと、周囲に強い印象を与えるんだそうさ。眼力のある上司なら

必ず記憶していて、重要な場面で起用してくれるそうだな。君の場合も、無意識にやったことだろうが、昼飯を食わずに、配達を完了させてしまうというのは、非常に効果的なやり方だったんだ」

それを聞いて、和也はなるほどと思った。

「おれは、途中で飯を食うのが面倒なんで、仕事を終えてからゆつくりしようと思っただけです。前任者のことは知らなかったんです。でも、その話は面白いです。エリートになる人はやっぱり、考え方が違いますね」

自分もこれからは意識的にそうしてみようと思った。

「きみは、それが判るかね。面白いと思うのか。そうか、そうか」成山専務は、相好をくずした。

「藤井編集長は、ぼくと大学が同期なんだがね。どうも、こういう話題に関心がなくてね……」半分愚痴のようという。

「はあ……」

和也は、会社においてもまだ、会話らしい会話をかわしたことのない藤井取締役の顔を思い浮かべた。温厚で、真面目な人柄のようだった。藤井取締役より成山専務の方が野心家でやり手なのは明らかだった。

「この日刊の家電特報を開発したのは、ぼくなんだよ。」

藤井編集長も手伝っているけれど、彼はどうもそういう開発精神がないんだよな」

同期とはいいいながら、すでに地位的に差をつけている相手に、いつまでもライバル意識をもつ成山に、和也は少しばかり違和感を持ったのだった。

ある日、和也が社長と碁を打っていると、その成山が外回りから帰ってきた。

「いやあ、暑くなった」とハンカチで汗を拭いた。碁盤の前に行っている社長と和也を見て、思わず舌うちをした。

「なんだ。昼間から囲碁とは……。社長はともかく、おい、青木君よ。きみに仕事はないのか」

「今日の分は終わらせました。ありません」

和也は碁盤から目をはなさない。

すると河村社長が言った。

「成山専務さ。こいつは筋がいいぞ。さつき九目だったけれど、途中で投げたよ。負けてね。いま、八目に減らしたんだ」

「なに？ 二局もやっているんですか」

成山は、一度は机の前に座ったが、いまいましそうに、すぐ立上った。編集部への仕切り衝立のなかに入り、

記者発表通知を入れた箱をかきまわした。

「おつ、あつたぞ」と彼は中から葉書を取り出した。

「おい、青木君、今日の四時からレコード会社の記者発表会があるんだ。ここは広告の縁が薄いし、編集記者の連中は、印刷工場に出払っているから、無視しておいたんだ。しかし、欠席するよりも、君でも出た方がいい。名刺は編集部の大野君の使いたまえ。おい、青木君、聞いているのか？」

「はい、はい」命じられて、やつと和也は碁盤から離れた。

「仕事があるのか。それじゃ、今日はこれまでだ」河村社長は、残念そうに盤を片付けた。

和也は、レコード会社の発表会招待の葉書を受け取りながら、

「成山専務、囲碁って案外面白いですよ。碁石の並びを考えていると、ほかのことを忘れ、頭が空っぽになります。ストレス解消にいいですよ」と言った。

「君がストレス解消になる分、ぼくがイライラしているのが判らんのか？ 君は、もともと頭が空っぽなんだろう。とにかく早く行って来い。会場は赤坂の（コパカバーナ）だぞ。終わったら、そのまま学校に行つてよろしい」

「はい」

和也は、笑いをこらえながら、外に出た。なぜか、専務を苛立たせるのは愉快であった。日ごろから「おい」といつて無意味に威張りくさる尊大な態度に、和也は嫌味を感じていたからだ。ほかの人の「おい」は気にならないのだが、彼の言い方は気に入らなかった。

地下鉄で赤坂見附に行き、階段を上って地上に出た。

西日が眩しく、ビルの窓に照り返っている。すぐ先に、交番があるのを目に止めた。

「（コパカバーナ）というのは、向こうでいいんですよ」

和也は、溜池の方向を指さし、立ち番の警官にたずねた。

「ああ、そうだ。ところで、あんた。歩いてゆくのかね」

中年の警官が、和也のくたびれたワイシャツと曲がったネクタイ、肩からさげた形の崩れたバッグを見つめた。

「ええ、地下鉄で来たんです。そんなに、遠くないでしょう」

「うん。(アマンド) という喫茶店の先だ」

「どうも」

じつと見送る警官を尻目に、和也は溜池方向に歩き出した。通りの反対側にはピンクと白の縞模様のホテルが戦艦のように横たわって見える。

たしかに(アマンド)を通り越すと、右側に広い車道の引き込まれた坂がある。その奥に(コパカバーナ)の装飾看板が見えた。和也は、交番でげんな顔をされた訳がのみこめた。そこは高級クラブで、普通は客が車で乗り付けるところだった。

玄関の受け付けで、招待葉書と大野忠司名義の名刺を出す。奥の階段をおりるように導かれた。脇に狭い庭があり、ドアの開いた部屋がある。入ると、冷房がよく効いていた。シャンデリアが輝き、壁から足元の絨毯までワインレッド色である。

手前から奥まで丸いテーブルがいくつか並び、正面に小さなステージがある。

ステージの中央には、小肥りの外国人が背もたれのない丸椅子に浅く腰掛けていた。女性の司会兼通訳と英語で話している。前の方のテーブルに十二、三人が集まっており、レコード会社から配られたプレスリリースを広げていた。すでに記者発表がはじまっている

らしい。

和也は、テーブルの端に席をとり、置いてあった資料を読んだ。

『《ロシアより愛をこめて》秘密諜報員007の主題曲発売記念。英国人歌手マット・モンロー来日』

プレスリリース資料は、丸写しすればそのまま記事にできるように、英国スパイ映画流行の経緯や、マット・モンローの歌う主題曲のヒットぶりが手際よく紹介されていた。顔写真も添付されている。ステージにいる男が、その英国人歌手であった。

「それでは、ピアノの伴奏で《ロシアより愛をこめて》をお願いしますよう」

精悍な表情をしたマット・モンローがステージの中央に立ち、これから封切りされる映画主題曲を朗々と歌いあげた。

濃紺のダブルのスーツに、黒光りする靴。外国人にしては小柄であったが、声量たつぷりで、会場の隅々まで歌声が響きわたった。記者たちは、聴きほれた。歌い終わると、賛嘆の拍手を送った。和也もなにか得をしたような気分だった。

「同じイギリスでも、ビートルズとは、ひと味が違うな」など、記者たちは小声で感想を述べあいながら、



それぞれ出口に向かった。

六月にビートルズが来日し、一大ブームになっていたからだ。

和也はジュースが出されていたのに、歌に聴きほれ飲み忘れていた。で、わざわざ席に戻って、それをあわてて飲みほした。

ふかふかの絨毯を踏んで出口に急いだ時、眼の前をいやにゆつくりと歩く女性がいた。彼女の背中に突き当たりそうになった。彼女は、立て縞模様のスラックスである。びつちりと尻に密着している。どう見ても下着の線はみつからない。長い裾のカーデイガンが一応、尻まで蔽っていた。だが、それは目の粗い漁網のような生地で、身体の線が充分に見透せた。

狭い階段を一步々々のんびり上っているの、和也はいったん歩みを止めなければならなかった。どうやらマット・モンローの歌に酔いしれているらしく、かれの曲を口ずさんでいる。細身で小柄ではあるが、左右に揺れるヒップは、ちよつとしたモンロー・ウオークの風情がある。急ぐからといって、折角の眺めを楽しまないのは無粋というものだ。和也はだまって彼女の後ろを歩いた。

男というものは、十五分に一度は女のことに考えている、という説を和也は誰かに聞かされたことがある。まさに同感ではあるが、女の方も、あれやこれやと男の眼を刺激するスタイルを考えつくものである。禁欲的生活を心がけている和也には、ありがた迷惑な風潮である。

じつは彼は夜間大学に入学したときに、少なくとも在学中は、可能な限り禁欲的に過ごし、学業一辺倒の生活をしようとして自分に誓ったのである。それに加え、成績の全科目を最高点の《優》で埋めてやろうともくろんだ。

教室にはじめて顔を出したとき、その半数が黒い学生服の、高校からの新卒者だった。昼間を受験したが首尾が悪く、志望を二部にしたものが多かったのだ。だいたいが昼間も仕事を持っていない。

それに較べ、和也は一度社会人となり、その後改めて入学してきている。彼らよりも、二、三歳年長である。その自分が、彼らと同じ発想で凡々と授業を受けていたのでは、あまりにも能がないではないか。

なんとか、経験と知恵を働かせて彼らよりも良い成績をとってやろう。それも暗記力やガリ勉でなく、知恵と工夫で楽々と単位をとらなければ意味がない。和

也は、そう考えたのである。

しかし、いくら楽々といっても、しばらく勉強する習慣から離れていたことであり、昼間は仕事につかねばならないのはハンデである。今までのように気の向くままに遊んではいられない。そこから、禁欲生活を送らねばならないという発想が出てきたのだ。

彼にとつて、ありがたかったのは、一度社会に出るからの勉強はじつに面白いのであった。それほど労することなく熱中できた。

その間、性欲の発散もない。彼は精囊に精子が蓄積されたのも、気がつかず、夢精をするまでに禁欲的であったのだ。夢精はかれにとつて、精進への勲章であった。

昼間は仕事をしながら通学する和也のような背広組は、だいたい彼と同年であった。社会に出て、一、二年すると、勉強し直したくなる連中が多いらしい。

新入生のなかには三十過ぎで子持ちの男もいた。その男が最初、革靴を手に教室に入ってきたとき、ほかの生徒たちは彼を教師だと思つて一斉に起立したものだ。

「いや、いや。私も生徒なんですよ。紛らわしくて、すみません」

照れ臭そうに若者たちのなかに入ってきた。

笑い声があがり、途端に教室はうちとけた雰囲気につつまれた。

和也も笑つてはいたが、内心ではその男の学ぼうとする情熱と意志力に感嘆していた。いつそう、気持ちを引き締めなければダメだと、自分を叱咤したものだ。

とはいっても、一時の感激での決心は簡単だが、それを実行するとなると大変なのだ。

性欲、睡眠欲、時に寄れば食欲や飲酒欲がそれを妨げようとする。若さの欲求との戦いであった。

前を歩いていた女がやつと階段を上りきり、明るいフロントに出た。

和也は女の後姿で眼の保養をすますと、今度は正面から顔を見たくなった。さりげなく足を速め、横から女の顔を見た。色白でややくれた顎。通った鼻筋。切れ長で日本的な一重瞼のスッキリとした感じのいい女である。カーディガンの下は薄桃色のブラウス、盛り上がった胸には、ツンとした乳首が浮きでている。ノーブラだった。

飾りのついた小さなバッグとプレス用資料入りの封

筒を小脇に抱え、正面の車道をぼんやりと見ている。この先の大通りに出る前に、タクシーが入ってこないかと、期待しているらしい。どうみても記者らしくはない。

クラブはまだ営業していない時間帯だから、まったく車の入って来る気配はない。

和也は、彼女とちよつと話をしたくなった。

「きみ、タクシーで来たの？」

「あつたりまえじゃないの。あなた、会社の車？もしそうだったら乗せてよ。わたし、飯田橋なの」

「いや、おれは歩き。学生アルバイトで記者の代わりに来たんだ」

女は、変な奴だという顔をした。和也の上から下まで――上着なしのシワだらけのワイシャツ、古ぼけた革靴――を見つめた。

それでも、警戒心は解いたらしい。

「飯田橋なら、おれのこれから行く大学に近いな。通りに出てタクシー代を割り勘にしないか？」

「いいわよ」

彼女はあっさり承諾した。歳は二十二、三か。ひとつつつこいところがある。

ふたりは車道の脇の坂を歩いて、外堀通りへの道に

出ると、タクシーをひろった。

「マツト・モンローの歌、よかったわね」

車のなかで、女がうっとりとした表情を残して言った。

「うん。ところで、きみはどここの会社のひと？」

女は、バッグから名刺をだした。

ミュージズ社・企画室／青葉日香里「月刊ミュージズ」発行、とある。

和也は、大野忠司名義の名刺を渡した。

「おれ、青木。この名刺は先輩の借物だけど、会社は同じだから」

彼女は、それをろくに見もしないで、バッグに入れた。

「顔出しだけなんですよ。わたしもそうだもの。マツト・モンローなんか、レコード会社の営業部から広告をもらって、とつくに記事が出来てるわよ」

「それじゃ、きみは営業係りなんだ」

横から彼女の姿態を観察しながらきいた。ブラジャーもショーツもつけていないのがすぐわかる。挑発的な、派手なスタイルだった。

「ほんとうは、歌手志望なの。でも、事務所に採用してもらえないの。しかたなくここの社長を手伝って

るのよ」

「なんだ。やっぱりパトロンがいるのかー和也は納得した。が、どこかの社長のヒヒジジイが彼女を抱いているのかと思うと、面白くない気分になった。

話しているうちに、市ヶ谷を過ぎ学校の近くも通り過ぎてしまった。飯田橋駅の水道橋寄りのところで降りた。タクシー代は結局、日香里が全額払ってくれた。彼の境遇に同情したらしい。

「あさって、銀巴里の近くのヤマハのビルで丸山明宏の会見があるでしょう。ヨイトマケの唄の公演をするのかなんとかで……」

そのときにまた会いましょうの意味なのか？ 日香里はそこまで言うと、手を振りながらさつさと近くの雑居ビルへ入っていった。

そのビルは、和也の会社の細長い小さなビルとは違い、青くくすんだ色ではあるが、四角形で高さもある。まだ、夕陽の残る八階あたりの外壁には、たしかに「ミューズ社」の看板が突き出ていた。

和也はそれから大学へ向かった。さつき、車で通り過ぎた外堀通りの反対側の土手を、十分以上歩く。

学校の門をくぐると、広場の片隅の教室の窓の下で、

学生が演説をしている。その場所に立つのは、たいいてい共産党系の組織、民青の学生である。取り囲んだ聴衆に彼らの仲間がいて、演説を盛り上げる役をしている。演説に反発し、すこし離れたところから、しきりに野次を飛ばすのは過激派であろう。

通りかかる学生たちの多くは、彼らを横目でみながら、教室のある建物に入っていく。

和也の一時間目の授業は、必修科目の英語であった。教室にかけつけ、机の前に腰をおろすと、急に疲れが出た。

☆

「そのの、ええと……、青木君か。このグリーン・アイズというのは、何を意味するのかな？」

居眠りをしていた和也は、誰かに上をつねられ、はつと顔をあげた。

「グリーン・アイズというと、緑の眼ですか」

「そりゃ、緑の眼といやあ、そうだけれどもね。もともと彼女は青い眼なんだ。それが緑の眼という表現になるのはどういうことだ？」

教師は苦笑していた。

和也は弱った。この教師はテキストを指定するだけで、生徒はそれを読み通してくるのが前提である。授業では質問と文学的解釈をのべるだけだ。テキストはトマス・ハーディの短編集だった。和也はまだ読み終わっていない。

すると、隣の席にいた小山由利子が和也の脇腹をついた。そして、囁いた。

「ジェラシーよ。嫉妬、嫉妬の眼のこと」

和也は、彼女に指で了解のサインを送った。

「それは、その女性の嫉妬心を表現しているのではないでしょうか」

「よろしい。それでは、隣の、ええと……ミス小山、この嫉妬心かられた女性のそれからの人生を暗示する描写があるのですが、それはどの部分でしょう」

藪から蛇を出してしまった由利子だが、すらすらと答えていた。

授業の終わり際に、教師は「テストは英語で問題を出し、英語で解答をするようにする。一夜漬けで安易に単位が取れるようにはしない」と宣言した。

「こりゃ、優を取るのには、おれには難しいや」

授業を終えた教室の出掛けに、和也は隣を歩く由利子に弱音をはいた。彼は由利子には自分の当面の目標

を話してある。

「大丈夫よ。わたしが助けてあげるから」

由利子は事もなげにいう。

小山由利子は、高卒からの現役組である。昼間部を志望していたが、意に反して落ちてしまい夜間部にきている。今は三年生から昼間部への転入を狙い、試験をうける準備をしている。父親が薬剤師で、新小岩にある薬局の娘であること以外は、和也も詳しくは知らない。丸顔で顔が小さい。目鼻立ちが整い、口元がきりつとしている。表向きはしとやかで、どこことなくお嬢さんの雰囲気を持たせている。しかし、それはまだ高校生らしさを残した若さによるもので、対人関係の応接の如才なさから見ると、これからいくらでも変わりそう気配があつた。

和也が由利子と親しくなったのは、同級の若林慎一を介してだった。若林は小山由利子と同年である。現役で昼間部を志望しながら、夜間部に通っているのは、由利子と共通していた。そのせいか、彼は彼女とすぐ親しくなった。若林は、表情にまだ少年らしさを漂わせ、笑顔に純なものを感じさせるところがあつた。

彼の家は、神奈川の鶴見で運送業を営んでいた。青

木和也は、大田区の大森であったから、学校の帰りは京浜東北線で途中まで一緒である。

若林は由利子と連れだっているときは、秋葉原で京浜東北線に乗り換える和也と別れ、由利子と一緒に総武線で彼女の家のある新小岩に向かっていた。

和也は、ふたりを似合いのカップルだと思い、将来はともかく、在学中は彼らの関係がつづくものと、漠然と思っていた。もともと和也は、彼らの関係や気持ちを深く忖度する余裕などなかった。お互いに接触する時間も短いのだ。

夜間大学の場合、同じクラスといっても、入学時に顔を合わせて、ちよつと雑談をした程度である。

授業は選択科目と必須科目があつて、必須科目は、卒業のための単位を獲得するために、誰でも出席しなければならぬ。そのときが顔を合わせる機会なのだ。三時限目に必須科目があるときだけ、和也は若林と帰りが一緒になる。

そんなある夜、大学から飯田橋駅に向かう帰り道、若林が和也に肩を並べてきた。いつも連れだっている筈の由利子が居ない。

「あれ、小山さんは休みかい？」  
「いや、居ましたよ。ぼく達と離れた席に……」

若林は、事情を説明しにくそうに、しばらく口ごもっていた。それから面白くなさそうな、暗い口調で言った。

「ぼく、この間、彼女と関係しましたよ。お互いに初体験だったんですけどね」

「へえ、素晴らしいなあ。恋愛の理想的な成り行きじゃないか。それこそ、心身ともに天にも昇る気持ちでしたらう」

羨望の気持ちをこめて、和也はいった。

「とんでもない。失望しましたよ。セックスなんて、現実に見てみると、たいしたものではないですね」といったあと、急に口調を改めた。「……それは、それでいいとしましょう。それよりも、彼女の意識の低さにあきましたよ。自分がどんなに非現実的な考えをしているか、わかっていない。だいたい社会主義思想というものが理解できていないんです」

和也は、何を言い出すのかと、若林を見つめた。

「きみ、それはどういう意味だ……。小山さんが社会主義思想に関心がなくなつて、べつにいいじゃないか。好きなんだらう」

「だめです。ぼくは、学生運動に全力を投入するんです。少なくともインテリゲンチヤをめざす以上は、自

己意識の革命からはいらないと、革命運動はできません。だいいち、彼女は、革命思想に共感すると言っていたので、ぼくはそれを信じて関係したんですよ。それなのに彼女は関係そのものにこだわり、革命意識など、まるでない……。幻滅もいいところです。話にならない」

若林は力んで、いまにも握りこぶしを振り回しそうな気配だ。これまでの、ちよつと自信のなさそうな、人当たりの柔らかい雰囲気の人柄が変わってしまったている。眼の光が強くなり、どこか偏執的な翳りがある。

「ええつ、それを彼女に言ったのか？」

「言いませんけれど、態度が変わったのが、判ったみたいですよ。ぼくの顔など二度とみたくないって、言っていましたから」

「ふうん。きみ、いわゆる革命ってやつを信じているんだ」

「青木さん。革命は信じるとか信じないとか、そういうものじゃないでしょう。起こすか起こさないか、行動力と活動の問題ですよ」

「それくらい、わかっているよ。で、どこの党派でやるんだ」

「教えませんよ。どうせ、ケチをつけるに決まってい

るんだから。青木さんのような、日和見主義者とは、対立するにきまっているから……」

和也は苦笑した。

若林は以前から、帰りの電車のなかで、革命の歴史的必然性についてどう思うか？ 自己の立場をどう把握しているのか？ とか、マルクス主義思想は本来、哲学、社会政治学、経済学の三位一体のもので、マルクス経済学という経済学だけを学ぶ大学のカリキュラムは正しくないのではないか、とかの議論を和也に仕向けてきていたのだった。

和也は説明した。

——経済学的には、革命の社会的必然性は、どこにも見えていない。自分の立場は、誰かが社会を変革してくれて、その恩恵を受ける立場であるならば、許容的傍観者になるし、かえって不自由な立場に置かれそうならば、反抗的傍観者になるだろう、だから、マルクス主義思想の理論を学ぶだけで、自分から政治運動をすることはない。現実にも生活に追われて、そんなことをする余裕もないと——

「それって、典型的な日和見主義ですよ」

若林は、軽蔑したように言ったものだ。

「きみね。プロレタリアートは、正しい日和見の仕方

というのが、死活問題なんだ。漁師が正確な日和見をしないで出漁したら、大時化にあつて船が転覆遭難するかもしれないんだぜ。だいいち、おれは五年間、労働者として生活してきた。実感として、プロレタリアートから真の革命指導者が生み出される可能性はほとんどないと思うよ。ある程度、生活に余裕のあるプチブルかブルジョワからでないか、革命なんて実現しないのじゃないのか」

若林は、その言い分には、耳を傾けたものだった。「なるほど、やっぱり社会生活の先輩は、ひとあじ考えがちがうんですね。一理ありますよ。でもね、青木さんは、プロレタリアートではないですよ。真のプロレタリアートは、そんな理屈すら考えないはずですからね」

その時期は、和也には若林の議論が、純粹に学究的なものに加え、将来は良い学者になるのかも知れないなどと、のん気に考えていたのである。

いま思えば、若林は大学の校内でしきりに同志づくりをしていた学生運動家に触発されていたのだろう。彼は、活動家から手渡されたアジビラをこまめに、受け取るタイプであった。彼の学問としての経済学は、

過激派活動化のデモ動員のためのアジテーション理論に粉碎されてしまっていた。デモにさえ行けば、いまの社会が良くなるなら、マルクスの経済理論などいらぬではないか。

それにしても、こんな若林を相手に初体験をしてみたら小山由利子は、とまどっているであろう。若林は、彼女が革命思想に共鳴していたといっている。が、それはちよつと恰好良く思ったボーイフレンドにたいするリップサービスだったはずだ。

そのことは、彼女の授業に対する姿勢を見れば推察できた。教師の話をきちんとノートし、テキストの予習は十分してある。高校の授業態度の延長そのままである。

彼女が授業外にマルクス・エンゲルス著の「共産党宣言」や「共産主義の原理」などを読む余裕があるようには思えない。

由利子は、ある時などは和也に「社会主義革命とか、帝国主義の内容なんか、どんな授業でやるのかしらね？」と訊いてきたくらいである。

「我々は経済学部だからね。そういうことの解説が知りたいとなると、社会学部でないとね。それにしても、授業というのは勉強したい分野の導入部というか、入



り口を紹介するだけだろう。地理でいえば、あれがアルプスで、これが穂高連峰だから、登りたいひとは自分でどうぞというガイドみたいなものさ。それから先は、自分で勉強するんだよ」

「えっ、それじゃずつと、こんな風に雑談まじりの講義なの？」

「雑談かどうかしらないけれど、重要じゃないと思つたら、居眠りしてればいいさ」

「そうですか。……そうなのよねえ」

彼女はその話が、妙に身にしみたようであつた。

「雑談みたいな授業でもあつたのかい」

和也が興味をしめすと、彼女が最近経験した授業のことを話してくれた。

選択科目で「文学」を受けたところ、長谷川四郎講師で、これといったテキストもなく、三島由紀夫の小説「美しい星」の内容の賛美にその日の授業が終了したというのだ。彼女は、それがピンとこなかつたらしい。

「悪くはないだろう。文学的授業らしいじゃないか。文学の神髄がこれだと思つて、方向づけをしてくれたとも考えられる」

彼女は、それでも浮かない顔をしていたものだった。

そんな彼女に、若林が思想的にどうこうと注文をつけるのが、おかしいのである。若林は由利子に学生運動の活動家になろうと誘つたが、断られたそうである。当然であろう。

和也は、由利子の態度を責める若林のほうに、なにか普通でない、硬直的な主張へのこだわりを感じてた。

さらに気になったのは、彼の両親が、もつと世間的に評価の高い大学への進学を期待していたのに、その期待に応えられなかつたと、よく話していたことだった。その頃は、もつと無気力な顔をしていた。それに比べ、いまの方が生き生きとして、力強さがある。いったい、何が急に彼を変えたのであろうか。両親の期待の重みから逃れるための行動ではないのかと、和也は思った。

そんなことがあつてから、若林は教室に顔を出さなくなつた。

夜間の授業の脱落者には、そのころふたつのケースあつた。

ひとつは、仕事の方を優先して勉強をしなくなる。あるいは収入の割によい仕事を失い、授業料が払えな

くなつて通学しなくなる場合である。

もうひとつが若林のように、学生運動に身を投じる場合である。とくに社会的というか、思想的というか、何ごとにも免疫力のない現役での大学入学者には、これが多いようだった。

☆

ところで、由利子の方はその後、若林とどんなやり取りがあつたのかは知らないが、普段と変わらない態度で、通学してきていた。恐ろしいほど、何事もない表情で周囲の仲間に接していた。

そして、和也に接近してきたのである。

卒業証書だけが欲しいという態度を隠さないうで、手堅く授業に出席している鳴尾という同級生は――彼は、昼間は有名な都銀の行員として働いていた――。

「小山さん、教室にくるとまづ君の居場所をさがすぜ、どうしたんだ？」と、笑う。

「わからないな。変に急接近されているんだよ。おれ、愛されているのかな」

「そうじゃないね。あれは、用事があるんだよ。接近なんてもんじゃないぜ、バリケード破りの突進だよ。」

まえばあんなに行動的じゃなかつたのになあ」

鳴尾は愉快そうに、また笑うのだった。

二時限目は必須科目の数学だった。高校の微分や積分のおさらいのようなものだったが、和也は習った記憶さえ欠落していて、理解できない。となりの由利子が頼りである。

正門の近くに六角形のコンクリートの校舎が建っている。その三階が数学の教室になっていた。古くて照明の暗い、陰気な建物である。最初にきたとき由利子が「中世の牢獄みたいね。お化けでも出るんじゃないの」と言つたほどだ。

狭い階段の上り口にさしかかると、同級生の二、三人がそこから下りて来る。

「だめだめ、講師が休みだ。休講だよ」

彼らの一人が言つた。

「なんだい、休みか」

「おい、休みだつてよ」

知らずに、後ろからぞろぞろと六角校舎に入ってきた学生たちに、次々とそれが伝言されていく。回れ右で、また出口に向かう。

「休講つてさ、月謝をただ取りされているんだぞ。腹を立てるべきだろう。それなのに、おれたちは内心で

喜んでいないか？ そんな怠惰な気持ちをも、みんなで反省、総括しろよ」誰かが屁理屈を言う。

「そうだ、そうだ……」

戻り足の学生たちから、笑い声がおきた。共感と、ささやかな連帯感を示す笑いだった。「青木さん、食堂へ行こうよ。カレーライス代はわたしが出すから」

由利子が和也の腕を引いた。

次の授業までに一時間半の空白がある。由利子は自分で本を読まずに、和也の知識を引きだし耳学問をしようとしているのだ。

「食堂のメシはまずいからな」ぼやきながら、和也は食堂に行った。彼女の買ったチケットでカレーをもらうと、隅のテーブルに席をとった。由利子は何も食べずに、向かいあつてノートを広げる。授業では学べない左翼運動や思想の概要を、和也からきくののだ。

彼女の知り合いでは、左翼活動については、和也が、いちばん知識のある方らしかった。もっとも、由利子が高校の教科書の解説でしか知識を得ていないのにくらべれば、和也は三年間の会社勤めの間、かなりその方面の書物を乱読していたのだから、その差は大きい。

和也はいままでこそ、身分不安定なアルバイトをして

いるが、入学するまでは、電気機器の組立工で、社員として働いていたのだ。大田区にある中小企業だったので、労働組合の結成にも協力し、第一期の職場委員もしていた。会社が彼の夜間通学を認めなかったのので、そこを辞めてアルバイト生活に入ったのだった。

彼女には、自分の知識は、あやふやなところもあるから、と断わりをいれたが、それでも良いというので引き受けたのだ。

由利子の質問の第一声は、

「全学連って何？　なんで学生が左翼運動にはしるの？」だった。

「えっ、ずいぶん根本的な疑問だな」

和也はさつそく答えに窮した。

「あれは、たしか全日本学生自治会総連合の略だと思うよ。授業料値上げ反対とかやっているあの連中の全国組織だ」

「それじゃ、民青、中核派、革マル派ってどうちがうの？　なんで対立しているの？」

「それは、六〇年安保騒動のときに、日本共産党主導だった学生運動が、そこから分裂して共産主義者同盟・ブント派という勢力に変わってしまったのだ。日本共産党は、それ以前に武闘的活動をやめ、民主的革命に

方針転換していたので、その不満分子がブント派となつた。

——ブントという名称は、一八四七年にマルクスが、それまでの共産主義運動を批判し、新しく共産主義者同盟・ブントを組織し、『共産党宣言』を書いたことに由来するんだ。それ以前の組織を共産主義者同盟・パルタイとしたんだ。だからブントとパルタイが今日でも使われている。

——それで、全学連に話をもどすと、六〇年安保で主流だったブント派は、安保反対運動でほとんどの指導者が公安警察に逮捕されてしまった。残ったブント派は、共産党とはべつに、一部労働者に浸透していた革命的共産主義者同盟に吸収された。国鉄動力車労働組合総連合の過激派など、反戦系労働者たちもその流れなんだ。

——この革共同の系列に、マルクス主義学生同盟・中核派とマルクス主義学生同盟・革命的マルクス主義派があるんだ。これが中核派と革マル派だ。この革共同に加わらない活動家もいて、そこから赤軍派などが出てきた」

「おなじ共産主義運動なのに、対立しあう理由は？」  
「うーん。まあ、民主的革命か、武力革命をめざすか

の違いだろう。おなじ武力革命を容認するのでも、考  
え方で戦略、戦術がちがってくる。

——もともとマルクスは、革命後はプロレタリアー  
ト独裁で、最終的には国家が死滅するとしている。そ  
れなのに、ソ連だの中国だのが一つの国で社会主義国  
家だとするのは、まちがっているという主張がある。

——革命は世界的に各国で同時に起こさなければ  
ならない。そこから武力闘争の世界的展開をめざせ、  
という赤軍派的な主張がでてくる。スターリンが一国  
社会主義を推進したので、反スターリン、反帝国主義  
の意味で反帝、反スタというわけだ……。

——中核派と革マル派の違いは、当初は中核派が、急  
進的な武闘主義だったのに対し、革マル派は段階的な  
闘争を主眼にしていたようだが、いまはセクト争いに  
明け暮れ、どっちもどっち。わけがわからん。……さ  
て、今日はこれでおしまい。カレーライスありがとう」  
そんな和也のおおまかな話を、由利子は真面目にメ  
モしていた。

「まだ、あるわよ。よくトロツキストって、非難し合  
っているじゃない、あれは何？」

「トロツキーというロシアの革命家の名からきている  
のさ。彼の理論が修正主義だということで、誹謗する場

合によくそう言っていた。最近は、そうは言わなくなつたろう。第四インタールという組織ができて、彼の革命思想というのは、再評価されているんだ……でも、その話はどう、いいよ。おしまいだ」

「そうね、また次の機会にしましょうね」

和也は、あきれて忠告した。

「あのね、これ以上は、自分で本を読んだ方がいいよ。社会主義思想の源流とか、歴史とかいう本があるはずだから。ユートピア思想からそれがはじまっているのを、知っておかないとね」

「ユートピアって……、そんなこと書いた本、生協にあるの？」

「いや、あそこは範囲の狭い専門書が多いからな。神田の古本屋のほうがいいだろう」

「それじゃ、今度の日曜日でも行こうかな」

由利子は、その気になつたらしい。

和也はほっとして「それがいいよ」と言った。

「なにいつてるの。青木さんも一緒にいくのよ。わたし一人なんかじゃ、いやだ」

「ええっ、日曜出勤させるのか」

「そう。報酬は昼食とコーヒーで、どう？」

「いいけれど、なんでそんなに熱心なんだ？」

社会学

部へでも転部するのか」

由利子は、軽く笑つてごまかし、それには答えなかつた。結局、日曜に御茶ノ水の駿河台下で待ち合わせることにした。

三時限目はお互いに、選択科目の授業だった。それで、ふたりは別行動になった。

☆

翌日の午後、日報の配達を終えて、会社に戻ると、和也は成山専務に呼ばれた。

「これを読んだか？」

成山は目の前に置いた電波日報新聞の、レコード欄を指さした。そこには、昨日のマット・モンローの記事が出ていた。

「この記事は、与えられたプレスリリースをそのまま写したものだ。この新聞は、日刊新聞だから、拙速でいいようなものだがね。うちの家電週報は、週刊だからな。これの二番煎じにしないで、記事に出来るか？ 折角、取材したんだから、埋め草用に記事を作っておきたまえ」

「はあ、やってみます」

記事を書けと言われたのは、初めてである。もちろん経験はない。和也は印刷物を乗せる机の隅に椅子を置いて、そこで思案した。あれこれ考えたが、なかなか良い案が浮かばない。結局、通訳の行った質問を、自分がインタビュールしたように作った。内容はプレスリリースに従った。

それではしかし、いかにもオリジナリティーに欠けるようなので、原作者のイアン・フレミングが英国情報局で活動していたらしいことや、日本で翻訳書を出版している早川書房が海外ミステリーの紹介に先駆的功績があるなどを説明。出版社に見れば、思わざるヒットであろうと解説を入れた。彼は高校時代から早川書房の翻訳雑誌「エラリークイーンズ・ミステリマガジン」を愛読していたのである。

これまで読んできたインタビュール記事を思い起こし、見よう見真似で、悪戦苦闘しているうちに、夕方になつていった。成山専務は、いつの間にか出かけていなくなつた。彼は、できた記事を専務の机の上に置いて、会社を出た。

その翌日、成山専務は、記事を書かせたことを忘れていたようだった。

隔日出社の川村社長がきていて、和也は午後には暮の

相手をさせられていた。

そのとき、また成山専務が、戻ってきた。

「おい、青木君。メケメケのシスターボーイだかなんだか知らんが、その芸人の記者発表会があるぞ。行つてきてくれ。それから、きょうは別に頼みがある。来てくれ」

和也を自分の机の前において、成山専務は低い声で話はじめた。

「じつはな、うちの新聞社は、発足当時は郵政省やNHKなど、官庁と深いつながりがあったんだがね、当社はこれまでに一度倒産しているのだ。そこで再起するにあたって、人員を十分の一にへらし、家電業界専門新聞に衣替えしたのだ。ところが、昔のつきあいの関係上、郵政省の専門紙記者クラブに、まだ所属しているのだよ。役所だから、購読予算枠も少し残っているんだ。だが、記事の取り上げる範囲は、ほとんど関係がない。クラブには机が置いてあるが、新聞綴りに、たまに行く程度で、ほとんど利用していない。そのクラブが今夜、郵政省の役人と暑気払いをするというんだ。ぼくも、藤井編集長も急用があつて、出られない」

要するに、今夜は学校へ行かずに、その記者クラブ

の会合に出て欲しいというのだ。

和也は考え込んだ。夜間の通学が条件のアルバイトなのに、だんだんそれが、守れなくなつて来る。学者になろうというのに、勉強ができない。

しかし、これはどこで働いても、大なり小なりあることだ。彼は経験的にそれが解つていた。この程度は、仕方のないことも知れない。

「わかりました。それじゃ、授業の欠席がもとで、留年したら卒業するまで勤めさせてくれるということ……」

冗談まじりで、和也は言った。

「もちろんだよ。いや、いや、そうしてくれると助かるな」

成山は破顔一笑した。なかなか良い営業笑いだと、和也は思った。

この会社が、かつて倒産したことを知つてみると、その割には貧乏臭さが無い。それは、この成山専務の再建の手腕によるものに違いない。彼には、効率の悪い分野や、競争に負ける分野を見きつていく決断力があるのだ。しかも、アルバイトの和也などをうまくコキ使いながら、なし崩しに、目立たずに撤退しようというわけだ。神経も細かい。

「それじゃ、きみ。恰好づけにカメラを持っていきたまえ。その箱に誰も使っていないのがあるんだよ」  
成山のいう箱には、古いペンタックスの一眼レフがあった。ボディのメッキが剥げ、真鍮色が出ている。フィルム巻取りレバーを引くと、止め金がすり減っているのかカチャカチャと音をたてた。なるほど、これでは使わない理由はわかる。

しかし、品物は高級品だったらしく、シャツターは高速でも動くし、レバーは遊びが多いだけでしたっけしている。

「どうだ。捨てるには惜しいだろう。きみ専用にしていいよ。いやか？」と、成山がいった。

「いや、うれしいです。これ中古品だとしても、おれの微々たる給料じゃ、買えないですからね」

「なんだ。ぼくの決めた給料が、微々たるものだっていうのか？」

成山は、苦笑した。それから、ふと思いついたように、

「きみな、これからは、おれというのを止めなさい。ぼくというように心がけて……。その方が、きみの若さのうちは、年上の取引先にも可愛がられるからな。私が、そうだったんだよ」

「そうなんですか。ぼく、ぼくですか。わかりました。そうします。なにしろ育ちが悪いんで……」

和也は、そういう具体的な指示をする成山に、尊敬心が出てきていた。

名刺は、また大野記者のものを使うことになった。「フィルムとフラッシュは、地下街のカメラ店で会社のツケで調達していい。新聞用だけの写真は、白黒フィルムを使ったほうが、紙面に鮮明に出る。それから撮った写真を相手が欲しいがるような場合は、カラーでな。だから両方を買っておきなさい。そうだ、今夜は手当たりしだいに、試し撮りをどんどんしたらいいよ。自分の思いこみと、出来た写真を較べれば、カメラの癖がのみこめるからな」

「はい、はい」

成山は、相手が従順に説教に耳をかすと判ると、やたら細かい。これは、欠点だろう。しかし、いつも自分の立場と、相手の立場をはかろうとするバランス感覚は非凡なものがある。それに経費をケチらない。これにも和也は、感心した。

準備に手間取っていたら、銀座での丸山明宏の会見はすでに始まっていた。意外と記者の数が少なく、十人前後である。丸山は、途中で席についた和也を、流

し眼でちらりと見たが、そのまま話を続けた。「ヨイトマケの唄」の聴衆の手ごたえを語り、花街で育った環境から、自分の人生の方向が決まったというような話をしていった。

このとき丸山明宏は、もう芸道に確信をもっており、風格があった。巷間の世評に反して、人間的に芯の強い、男っぽい精神が印象に残った会見だった。

☆

和也は、赤坂で知りあったミュージズ社の青葉日香里が来ているのではないかと見回したが、彼女は居なかった。だが、会見が終わってエレベーターで一階に降りると、彼女が出入口のところにいる。

「はあい、大野さん。会見が終わったのね」と声を掛けてきた。

「大野というのは、借りた名刺のこと。ぼくは青木だ」

「ああ、そうだっけ……」

彼女は、あまりにも遅れてきたので、出席しなかったのだという。会社の連中に、話を合わせておくのに、簡単に内容を教えてほしいという。

まだ四時半である。時間はある。このあとの、郵政



省記者クラブの集まりは、六時なのだ。郵政省は虎ノ門の近くである。地下鉄で十五分もかからない。

「ぼくも、遅刻してね。でも概略はわかったから、教えられるよ。そこから、お茶でも飲もうか」

銀座裏のこじんまりした喫茶店に入った。記者会見の概要の説明は五分で済んでしまった。

日香里は、茶系の渋い柄のシャツに、同色系のスカートだったが、やはり腰のラインがはっきり浮きでるスタイルだった。深いえりぐりから、胸の谷間が見える。

向かいあつて見ると、うりざね顔の顎のところに、小さなホクロがあり、日本的な目鼻立ちだ。紅とアイシャドウの薄い化粧が効果的である。肌はなめらかで艶があつた。時間と金のかかった美しさであつた。

「このホクロ、描いてあるのよ。わかる？」

和也の視線に気づいて、日香里が言った。

「いや。だけど、なるほど……。顎のかたちが引き立つね」

「そつちも、今日はどうしたの？ カメラバッグなんか持って、それにネクタイも新しいみたいじゃない。

貧乏臭くないわね」

「そうだろう。靴もそうなんだ」

和也は、得意げに組んだ脚を、少し通路の方に突き出して彼女に見せた。

実は彼は、前の日に成山専務の使いで、大森にあるフロンティア・オーディオというステレオメーカーに書類を届けに行ったのである。

相手は田淵という広報課長だった。成山とは、かなり親しくしているようだった。

和也が書類を渡すと、

「ああ、きみが成山さんの神経を逆なでにするという青木君か。仕事中に碁を打つそうじゃないか」と笑う。

「いえ、それは誤解です」

和也は汗が出てきた。

しばらく擲揄されたあと、何かを思うような顔をした。

「きみはぼくと体格が似ているな。ちよつと待て。買って失敗しちやつた靴があるんだ」

田淵は席をはずすと、いちど部屋を出てまた戻ってきた。まだ新しいような靴を持ってきた。

「これ、試してみな。どうも、おれには履きごこちがよくないんだ」

和也が足を入れて見ると、すこし窮屈だったが、履

けないことはない。

「びったりです」

「それじゃ、使ってくれよ。靴も苦学性である、いや今は勤労学生というか、そのきみに履いてもらえば、本望だろうよ」

和也は礼をいって、受け取った。

「いいんだ。そのかわりだな。これをしてくれ」

それは、夏用靴下だった。くるぶしのところに、フロンティアのマークがある。

「公園のベンチでも、喫茶店でも良いさ。腰を掛けたら、ズボンの裾をちよつと上げてな、靴下のフロンティアマークをひとに見せびらかすんだぜ。それが、靴代のかわりだ」

本気か冗談か、田淵課長はそういうのだった。そして、ネクタイもくれたのだ。マークこそないものの、ブルーの同社指定のいわゆるフロンティアカラーのものであった。

話を聞いた日香里は、半身をのけぞらんばかりにし、両手をはたいて面白がった。そして、言った。

「でも、すごいじゃん。フロンティアってさ、これから伸びる会社だってよ。うちの雑誌の広告もだんだん

増えているんだって。それにね、噂では、近々レコード業界にも進出するらしいよ……。いまから、その広報課長から気に入られるなんて、いいじゃないの。大野さん」

「おれは青木だよ……。気に入られるったって……。お使いに行っただけだぜ」

「あんた、見かけより幼稚だね。そんな話は、なにかウラがあるのに決まっているわよ。絶対になにかあるって……。それより、もしフロンティアがレコードを出すようになったら、私を紹介してね。……デートしてもいいよ」

切れ長な眼に、野心の輝きがあった。

「いや、結構だよ。これから、ぼくは用事がある」

「今すぐだなんて、言っけないわよ。わたしだって、これから赤坂で仕事があるんだもの。もしかしたら、進行次第では、歌を唄わせてくれるかも知れないんだ」  
そういつて、日香里は時計をみた。時間をつぶし過ぎたと思っただのか、お茶代を和也に出すと、あわてて席を立ち、店を出て行った。

独りになった和也は、コーヒーマウ一杯頼んだ。

成山専務は、記者クラブの会合は、暑気払いだと言っていた。酒を飲むことがあっても、眠り込まないよう

に、カフェインを多めにとっておこうと思ったのだ。あとは、ただ目立たないようにし、出席だけすればいいのである。気持ちに負担はなかった。

和也は、くつろいだ気持ちで、静かな銀座裏の通りを眺めていた。ふと、彼は、日香里が気づいたほどの自分の服装の変化を、あの神経細やかな成山が、話題にしなかったことに思いあたった。しかも、きのうは成山の突然の指示でフロンティア・オーディオに行ったのである。

だが、一方で和也は、自分がどんなにみすばらしい格好をしていても、成山が従業員の服装や容貌について軽率に話題にしたことがないことも思い浮かべた。これは成山だからこそその思いやりであろう。そうすると、成山は和也の服装のみすばらしいのを直したくて、自分では言い出せずに、親しくしているフロンティア・オーディオの課長と打合せをして、靴の新調を仕組んだのかもしれない。そうだとしたら、優しすぎて、陰にこもりすぎているのか。

そのくせ、成山はレストランの従業員やタクシートの運転手には、一緒に連れて行ってもらって恥ずかしくなるほど、威張るのである。おい、の連発がはじまる

のだ。

彼は、靴が買えないほど金がないわけではない。今日も、靴の新調に合わせて、スラックスは買い置きの新しいのに替えている。ただ、印刷作業をすると簡易なマシンだが、それでも、どうしてもインクで服が汚れる。彼は、着替えるのが面倒なので、汚れてもいいような、普段着で出社することが多い。それで街に出ても、彼は気にしないのである。

会社の体面上、和也の風体の具合がわるいのなら、はつきりそう言えば良いのだ。それは立場と生活感の違いなのだから、いくらでも直せる。和也自身、己れの風采と大会社の近代的なビルに、違和感を感じないこともないのだ。

しかし、自分の憶測だけで腹を立てても始まらない。こんど、そのことを成山専務に聞いてみようと思った。

☆

記者クラブの会合には三十分以上早かったが、彼のその足で、虎ノ門の郵政省に向かった。専門紙記者クラブは、専用の部屋があって、新聞社各社の机が並んでいた。その数からすると、メンバーは十社ほどにな

る。和也は、初顔なので先にきていた連中に、社名を告げて指定の机の席についた。

集まった人たちは、営業上がりらしい者、重役タイプ、業界では古顔そうな記者など、様々だ。いずれも中年か、年配者の男たちで、なかでは和也が一番若そうだ。

親しげな彼らたちの雑談に、聞くともなく、耳を傾けた。

——うちの広報担当のする○○さんは、もうじき定年だろう。その後どうするのかな？——彼は、北海道の出だから、故郷に郵便局を新設できるように変わったらしいですよ。

——へえ、やっぱり本省にいと下つ端といえども違うね。郵便局長になれるのかい。

——省内で、いろいろ運動したんじゃないの。

——抜け目ないからな、彼は……。

——××さんも、まもなく定年だろう。行くところが無いって、悩んでいたじゃないか。

——いやいや、この間、上席に頼みこんで、外郭団体の総務部におっつけてもらったって、涙ぐんで、喜んでいたよ。

——ぎりぎり、セーフか。それでも良かったじゃない

か。不器用で、泳ぎまわるのが下手だからな、あの人。  
——うん、たしかに彼は下手、下手……。本省にいるのに、あれだからね。

彼の後釜は、誰それだろうとか、役人の人事に関心があるようだ。

そのうちに、FM放送局開局認可の話題になった。いままで、人事に詳しくなかった年配の記者が、質問していた中年の記者に逆に訊きはじめた。仲間同士でも専門分野があるらしい。

——FMの地方局が各地に認可開局できれば、ステレオ放送が拡大するんだ。受信機が売れるからね。電波総括局の役人は開局の認可に時間をかけているが、オーディオ・メーカーは、早く認可して欲しく、落ち着いていられないわけだよ。

——それじゃ、まず政治家からだね、動かすのは。政治献金をしてからの話だな。積極的なところは何処？

——そりゃ、家電総合メーカーの竹山電器さ。

あとは、オーディオ・メーカーのフロンティアが、熱心だね。

——フロンティアが？

——うん、なにしろあそこは、総合メーカーの家電系列

店に食い込んでいるからね。オーディオ商品の普及率を上げた功労者として、専門メーカーの意地を、流通業界にアピールしたいのさ。竹山電器には系列店の販売ルート締め出しをくって、いじめられているからな。

——家電業界でも、政治献金はしているんだらう。

——しているけれど、ほかの業界に較べたらすくないよ。だからこのふたつメーカーが独自に政治献金をして、放送局の増設と認可を推進するように仕向けたわけだ。

どうも、話題に応じているのは電界新聞の記者らしい。和也は、ここでもフロンティアの名が出たので、耳を傾けていた。

そのうちに、郵政省側の職員が部屋にやってきた。

「みなさん。お待たせしました。今晩は毎年恒例で、皆様との情報交換を兼ねた暑気払いということで、計画しているんですが、たまたま同じ場所に、民自党の出口祐三衆議院議員が、この専門新聞記者クラブ懇親会にこられるそうで、できるなら時間が許せば、皆さんにご挨拶してくださいということなんです。で、とりあえず、車を用意してありますので……」

職員に知らされて玄関を出ると、ハイヤーが四台、つぎつぎとやってきた。

三、四人ずつに分かれて、それぞれの車に分乗する。

和也は、でっぷり肥った電波日報の記者と同じ車に乗った。

「会場はどこ？」

職員に、肥った記者が訊いた。

「赤坂の栄龍という料亭です。たまには皆さんにも豪遊らしき息抜きをしていただいたらという、総括部長のご提案です」

「下田部長が？ 今日居ないじゃないか」

「いや、もう先に料亭で皆様をお待ちしているはずですよ」

「なんだ。それじゃ、出口代議士と一緒にんだらう。」

出口さんに、民間FM放送局の開局認可の圧力をかけられているんじゃないのか」

「それは、どうですか。出口先生は郵政省の電波監理行政に関心が高いですから、勉強はされているようです」

「とぼけても駄目だぜ。それじゃ、栄龍には、ほかに曲者が来ているだろう」

「いや、知りません」

「ミューズ社の小根山社長のことさ。どうだ、当たりだろう。彼は民自党への政治献金のパイプ役で、黒幕の先兵だぜ」

「それは、知りませんです。はい」

「オフレコでいいから、彼らの話をききたいな」

「それでしたら、今夜ぱっと騒いでいるなかで、それとなく取材されたらどうです。出口先生は、一般紙には、失言をスツパ抜かれて、警戒心が強いですけど、中田さんなら業界内部の人で、身内みたいなものですから、大丈夫ですよ」

ふたりの会話をそれとなく耳にしながら、和也はミューズ社の名前が出てきたので、内心で驚いていた。

青葉日香里のパトロンではないか。この中田という記者は、相当の業界通のようだ。この男をマークしていれば、日香里を愛人にしている小根山社長とやらの、顔もおがめそうだ。好奇心で胸が踊った。

料亭のへ楽龍は入り口が通りから引つ込んだところにあった。玄関のなかに入ると、思ったより広くて大きい。靴脱ぎのところで、和也の重そうなカメラバッグを見た女将らしき女が、寄ってきた。

「お荷物、お預かりしましょうか」

「いえ、貴重品ですから」和也は断った。彼にとつて、

中古のカメラは、たしかに貴重品であった。

案内されて廊下を歩くと、小さな部屋が幾つもあるのがわかる。誰かが、それを不思議がると、案内の女性が「近くのテレビ局のひとつが、大勢でいっせいに朝方まで使うこともあるんですよ」大手の新聞記者は優遇されているのだ、と説明している。

通された部屋も広くはなかった。十五、六人程度の宴席であったが、それでちょうど良い広さであった。両側は襖で仕切られている。上座には一応、床の間らしきものがあつた。和也は、その反対側の下座に席をとり、テーブル下にカメラバッグを置いた。

☆

和也には、肩書もわからない郵政省の職員とその上司が、挨拶をした。

「……今夜は、楽しくご懇談ください。なお、総括部長や議員の出口先生も、その間に、ご挨拶があるかとおもいますが、非公式の無礼講ということで、ご配慮をおねがいします」

向い側の席にいた、中年の記者が和也に低い声で訊いてきた。

「わたしは、この記者クラブは上司の代理できたんですが、さつき言っていた出口議員とは、どんな関係があるんですかね」

「いや、ぼくも代理でわかりません」と和也は答えた。すると、彼の隣の年配の男が、横から口を出してき

た。「そんなの決まっているだろう。向こうでお偉いさんが、会合を開いたのだが、その名目は我々記者たちとの懇親会に出席したということにしたいのさ。——ふだん顔合わせしないはずの利害関係者が、会合をするんだ。第三者に知られても、たまたま共通の勉強会で知りあった仲だと言いつ抜けができるじゃないか。我々がその証人だよ。費用も記者クラブ懇親会の理由で落せる。見てろよ、芸者が出てきても、我々には一度だけお酌をして、あとは向こうの本陣にゆくぞ」

男は、向かいの襖のほうに顎をしゃくつた。「はあ。そうですか」

和也は、相槌をうった。

「そうですか、じゃないよ、きみ。われわれ専門紙はだな、そうした事情を知っていても、書かないから、敬意を払ってくれるんだ。それが、いくら実のない会合だつてだよ。あんたらみたいのに、何も知らんのをよ

こされると、足元を見られるんだよ。我々の沽券にかわるじゃないか。わたしがそう言つて、文句を言つていたと、社長に伝えなさい」

向かいの男は、自分の事と思つて恐縮していた。「いや、ごもつとも。わかります。これからせいぜい勉強しますから、よろしく」

男は、愛想良く年配の男に接している。和也は、相手が誰だかも知らないもので、黙っていた。

酒宴がはじまると、和也の背にしている襖が開いた。着物姿の女たちが四人ほど、にこやかな表情で、ぞろぞろと入ってきた。下座の和也は無視され、みんな上座のほうに寄り集まる。

だが、一人だけ、中ほどでぼんやりしている女がいた。

和也は、彼女を見て目をみはつた。なんと、銀座で会つたばかりの青葉日香里だった。薄青い涼しげな紋様の着物姿だ。笑顔もみせず、手持ち無沙汰にしている。本職の芸者でないのは、一目瞭然である。

あたりを見回して、彼女も和也に気づいた。

「なんだ、大野さん。こんなところにも出られるの。やっぱり将来有望なんじゃないの」

「ちがうつて。ぼくは、青木なんだ……。君の仕事つ

て、これかい。どこで歌を唄うんだ？」

「知らないわ。だって、うちの社長がそう言ってここへ寄こしたんだもの。わたしのために着物まで用意してあったわよ」

日香里は、和也にすり寄ってきてビールをつぎながら言った。

「小根山社長が、か？ 今どこに居るの」

「うちの社長、知っているのね。社長は早くから来ていて、向こうの部屋で会議をしているわよ」

日香里が、向かいの襖を眼で示した。と、その時ちようど、芸者のうちの上玉らしい二人が、その襖を小さく開けた。手をつけて挨拶をし、吸い込まれるように中に入り、襖がまた閉じられた。

座が賑やかになっていった。さっきの年配の男が、和也のところにも、にじり寄ってきた。

もう、酔いがでてきているようだ。

「もし、もし。お若いの。お前さん、手が早すぎはしないかい。この若い芸者をもう引っかけたのか。君は、どこの新聞社の誰だ？」

和也は、クラブの登録記者が大野忠司になっていることを、思い出した。

「大野です。週刊家電の……」

日香里が和也の背中を、軽く叩いた。

「やっばり、あなた。大野さんじゃないの……」

和也が返事につまった。すると彼女は、年配の男の手を取った。

「なによ、社長さん。こんな若い人なんか目じやないわよ。さあ、こっちで飲みましょう」

「何だよ。あんたは、こいつをかばっているのか？」

「そんなんじゃないわよ。こっちで、二人だけで飲むうと言っているの」

日香里が、男を上座の方に連れて行ってくれた。

和也はその間に、出された料理を胃袋に落とし込んだ。横目でまわりを見回すと、食べているのは和也だけである。あとは、残された芸者を抱き寄せたり、なにやら議論をはじめて、喧嘩腰なのもいる。

そのとき、さっきの男が本陣と言っていた襖が開いた。

その部屋にも、やはり宴席のテーブルがあり、さつき入った芸者を除いて、六、七人の男たちがいた。みんな立っている。一人がこちらの部屋に声をかけた。

「ええ、みなさん。ただいま出口先生が、所用で来ておられるのですが、当方の打合せが長引き、皆様との懇談ができなくなりました。出口議員は、われわれ放



送關係業界の発展に……」

和也は、ここで出口代議士の写真が撮れたらと思ひ、テーブルの下のバッグから、カメラをとりだしはじめた。彼はカメラを使って見たくて仕方がなかったのである。フィルムは白黒が装填してある。

だが、出口代議士は、ごく短く、自分の働きを期待してほしい、と述べただけで、宴席を立ち去ってしまった。彼の後ろから、やや大きめのバッグを持った男が二人、ついて行つた。和也は、カメラを手にしただけで、使うタイミングを失つた。

電界新聞の中田という記者が、あわてて代議士を追いかけたが、しばらくして戻つてきた。和也はバッグから出したカメラをもとに戻さず、バッグの上に置いた。また、こんな機会に出会つたら、もっと迅速に行動しようと、反省したのである。

宴席が、また騒がしくなつたところで、中田は本陣の席にいた一人の小柄な男に食い下がつていた。

「きょうは出口さんと、何の勉強会だったのです。下田部長……」

それを、すぐ近くにいた男が押しとどめた。

「中田さん。今夜は下田総括部長の息抜きの日なんだ

よ。無礼講で遊べるって、楽しみにしていたんだ。無粋なことはよそうよ」

「それじゃ、あなたでもいいですよ。小根山社長」  
「どうも、いつものもの分かりのよい中田さんらしくないな。よしましようよ。また別の機会に……」

和也はそこで、日香里を愛人に行っているらしい、小根山社長の顔を見ることができた。歳は四十二、三か。細面で背が高い。猫背気味で当たりの柔らかい応接をする男だ。飄々としたなかに、他人に腹の内を読ませない工夫があるようだ。和也の想像していたような、助平なヒビジイの様相をしていなかった。

その時、足元をおぼつかなくしていた下田部長が、いきなり傍らの芸者の一人に抱きついた。

「きみは、サービスが足りないんじゃないですか。出口先生に、体を張つたもてなしをしましたか」

そう言いながら、手を女の胸もとに入れていた。  
「あのかたは、そういう方では……。ちよつと、ちよつと、おやめになつて」

芸者は、困つたようすで、小根山の顔をみた。助けを求めている。

「部長、呑み過ぎましたね。女をいじめちゃいけません。着崩れさせてるじゃないですか」

小根山は、部長を抑えた。その間に彼の目配せにならずいて、すり抜けるように芸者が離れた。

「なんだと、きみい……。いや、失礼。小根山社長、話がちがいませんか。私好みの若い女はどこです」

下田部長という男は、もう泥酔状態だった。日焼けした顔をし、高級そうなスーツで、ぴっちりと身をかためている。酔っていなければ、手堅い銀行マンといった感じの男だ。職場ではよほどの権力を振っているのか、周囲のとりまき連中が、彼に遠慮をしているのが、よくわかる。小根山だけが部外者で別扱いらしい。

ねちっこく絡みはじめた部長をなだめながら、小根山は日香里を手招きして呼んだ。

「この娘は、青葉日香里といって、デビュー前の歌手です。もとの席で、彼女の歌でも聴いてやりましょう」  
小根山が日香里になにか耳打ちをした。日香里の顔が固く緊張した。小根山に、肩を強く揺さぶられて、うなずいた。

彼らは、もとの部屋に日香里を連れて入り、襖を開けてしまった。この騒ぎで、中田は取材をあきらめたのか、不満顔で席にもどり、仲間と酒を呑みはじめていた。

和也は、彼らがなにを始めるのか、襖を細くあけて、

なかを覗いて見た。

日香里が部屋の端に立って、小さな歌唱本の頁を繰っている。彼女の正面のすぐ近く、足元にべたりと座りこんでいるのが下田部長だ。他の連中は、すこし離れたところで、座って見ている。

「早くしろ。歌手だというのに、そんなものも知らんのか」

部長が言っている。

「はい……《王将》ですね。ありました。歌詞が正確にわからないんです」

本を片手に日香里が歌いだした。高い声で、演歌らしくない歌い方だ。しかし、声は響く。それが耳に入ったのだろう。いつの間にか、彼の後ろから、みんなが覗いていた。

「へえ、あのいちばん芸者らしくない女が、いい芸をもっているじゃないか。みんなに聴かせろよ」

中田が、襖を大きく開けた。

「いいぞ。歌も、女っぷりもな」

ほかの連中が拍手した。すると、下田部長が不満そうに「この娘は、私のためにだけ、歌っているんだぞ」と、彼女の足首をつかんだ。

日香里は、それを無視して歌をつづけた。

和也は、急いで自分の席に戻り、カメラをとってき  
た。みんなの後ろからカメラを構える。歌う日香里を  
撮る。

一曲目が終わると、下田部長が命じた。

「こんどは、《帰り船》だ。バタヤンだ」

「帰り船って？ バタヤンってどういう歌ですか」

日香里が懸命に歌唱本をめくる。

「そんなのやめろよ。《川は流れる》が、いいだろう。  
仲宗根美樹だ」

和也の後ろから、中田の声がした。

「あつ、それなら歌えます」

日香里が、嬉しそうに返事をした。

「なんだと、お前。私のいうことを無視するのか」

下田は、彼女の足首を思い切り引いた。彼女が倒れ、  
裾が割れた。下田は彼女の腿の奥に手を入れた。

「こいつ、こうしてやる」

日香里が幾度も悲鳴をあげた。

周囲は一瞬、啞然として動かなかつたが、すぐ、小  
根山を先頭に駆けよって止めに入った。

和也は、カメラを向けるとシャッターを切った。急  
いで巻取りレバー押し、三回はシャッターボタンが押  
せた。彼は、フィルムを巻取りながら、急いで席にも

どり、カメラをバッグに、フィルムをズボンのポケッ  
ト入れた。そして、皆の後ろに戻った。

小根山に抱き起こされた日香里の顔は、歪んで凍り  
ついていた。短く途切れる呼吸から、声を立てずに泣  
いているのだとわかった。誰かが呼んだらしく、女将  
があたふたと駆けつけてきた。日香里の背中を押すよ  
うにして、彼女を部屋の外に連れ出した。

「部長、いくら何でも、やりすぎですよ」

小根山が、苦々しさを抑えた口調で言った。

「小根山社長。彼女はいいですね。また、遊ばせてく  
ださい。私は、さっきパンティの上から撫でたつもり  
なのに、いきなり割れ目に吸い込まれましたよ。彼女  
はノーパンでしたな。は、は、は」

それつがまわらず、眼がすわっている。

周囲は妙に静まりかえっていた。

「ちえ。噂の通りだぜ。ふだん真面目づらをしてる分、  
破目をはずすと異常だな」誰かが、ささやく。

「シツ、聞こえるぞ」別の声が制した。

「ところで、さっきシャッターの音みたいのがしなか  
った？ 誰か写真を撮りましたか」

小根山が、気がかりな様子でまわりを見まわした。  
「いえ、自分は気がつかなかったな」誰かが言った。

「そうですか。気のせいかな」

小根山のさぐるような視線が、和也にもそそがれたが、彼は黙っていた。

「お帰りの車が用意してありますので、都合のよいところを運転手に、お告げください」

女将が言った。時間は午前零時をまわろうとしていた。何人かは、お開きの言葉を待たずに、居なくなっていた。

和也が玄関先で、どこで降ろしてもらおうかと考えながら、車の順番を待っていると、

「週刊家電の大野さん、ちよつと……」

小根山が、彼を追ってきた。腕を取って、玄関の隅に導いた。

ここは大野で通さないと面倒だ、そう思いながら和也は、写真を撮ったのがバレたかと、緊張した。

「あなたは日香里と知り合いだつてね。あの娘には、今夜はすっかり借りをつくっちゃつてね。いまも、臍を曲げられちゃつて困っているんだ。トイレに閉じこもつて出てこないんだ……」

話の向きがちがうようだ。小根山は、話しながら、彼のカメラバッグを眼にしたが、無関心である。

「それが、ぼくと、どういう関係が……」

和也は、内心ほつとしながら訊いた。

「いやね。さんざんゴテたあと、大野さんに用事があるので、一緒に帰らせてくれと言いつ出したんだ。それで、車をふたりだけで使うように手配したよ」

「はあ、それは構わないですが、どうしてでしょう」  
和也は、変に思った。

「うん。なにか受け取るものがあるつて、言つてたな。覚えがないかい？」

「ええ……」

返事をしながら和也は、最初にカメラを構えたときに、日香里が歌いながら、彼を見ていたことを思い出した。

「とにかく、頼むよ。日香里は世田谷の岡本にあるわが社の寮に居るんだ。ここからは、一直線だ。もう遅いから、大野さんも一緒に泊まろうが、どうしようが、それは彼女との話合い次第だぜ。いいだろう」

小根山は、片目をつぶつてみせた。

日香里を愛人に行っているにしては、理解があり過ぎる。それは和也の思い過しらしい。

「わかりました」

☆

運転手にドアを開けてもらい、和也は日香里とハイヤーに乗せられた。後ろの座席に並んで座った。世田谷に入ったから日香里が運転手に降りる場所を知らせることになった。和也はこの辺の土地勘がまったくない。

日香里は表情は硬いが、もう平静をとりもどしていた。彼女は宴会の時の着物のままである。女将が、着たままで返さなくていいと、言ったららしい。洋服は手提袋に入れていた。

「あなた、わたしが歌っているときに、写真を撮ったでしょう」

しばらく走ったところで、日香里が肩を寄せてきた。耳元でささやいた。

「ああ。試し撮りだよ。それに、なにかの記念になるだろうと思ってるね」

それは、彼女向けの言い訳で、腹の内ではちがっていた。役人たち幹部の夜の生態の一場面として、なにかの価値があるのではないか。会社の成山専務に見せて、判断してもらおうと思っていた。

「なにが記念よ……。そのフィルムをちょうだい。捨てるのよ。わたしの恥よ。もし、わたしが、これから

世に出たら、どうなる。過去にはあんなところで、生活のために肌見せもしてましたなんて……。イメージを傷つけるじゃないの」

「えっ、そういう意味か」

「ほかにどんな理由があるというのよ、ばかね。今夜のことで、小根山社長はさ、わたしが受けたショックの代償に、コロラドレコードの専属歌手になれるように、プロダクションを説得してくれると約束したのよ。あの下田ってドスケベは、社長にとつて、よほどの重要人物らしいわね」

「なるほど、そういうことか。でも、このカメラは古いし、フラッシュなしだから、きつと写っていないよ」

「そんなの問題じゃないわよ。ちよつと、カメラを出しなさいよ。わたしの目の前で、フィルムを感光させるのよ」

「よせよ、まずどんなものが写っているか、ぼくが確かめてからの話だ。それからどうするか、考える。ほんとうに何も写っていない可能性の方が強いんだぜ」

「あんた。やるじゃないの。何を企んでいるの」

日香里の眼が、きつく輝いた。本気で不安になった顔だ。

「どうします？ 環八に出ますけれど……」

そのとき、運転手が声をかけてきた。

日香里があわてて辺りをうかがい、暗い脇道に入るように頼んだ。両側が畑だった。すこし先の坂をくだって、小さな川の近くで、車を降りた。

そのあたりは、屋敷やマンション、住宅がかなり集まっている。どの家の庭も木が多く、空を暗く蔽っていた。

そのうちの、一軒の洋風の建物の、低い門扉の前に、日香里が立った。奥行きが五メートルほどの前庭がある。その先の玄関灯の光でも、雑草がはびこっているのが、わかった。かすかな光で時計をみると、午前一時前である。

「泊まって行つていいのよ」

日香里が、和也の肩に腕をまわしてきた。そうしたまま、もう一方の手で門扉を押す。

さっきの強気の態度にくらべ、ずっとソフトだ。作戦変更らしい。日香里のやわらかな肌を感じながら、和也は冷静だった。

いずれは日香里にフィルムを渡すかもしれないが、とりあえず一度自分がその出来具合を見てからにしたかった。今はすぐに渡す気はなかった。せつかく自分が写したものを、日香里が結果も見ずに寄せせという

のは、傲慢すぎて気に入らなかつた。

それに自分は禁欲丸という船の船長ではないか。目的さえあれば、欲望は抑えられる。禁欲航路はこれまで順調である。自信はあつた。永い期間ではない。卒業までの、しばらくの辛抱なのだ。柔肌の感触にも、心が揺らぐはずがなかつた。

部屋は二階だつた。二部屋があつて、ひとつは空いていた。

日香里の部屋は、一LDKで床はフローリング。浴室、トイレつきである。リビングには、冷蔵庫と長いソファーだけが目立つ。奥の部屋にはシングルベッドとステレオがある。

日香里の話によると、この家の二階の部屋は、一時的に社員に貸すことがある。が、一階は社長専用で、かれのお気に入りの愛人と過ごすために使うという。「すると、その秘密事を知る、きみと社長の関係は、何なの？」

「教えない。フィルムをくれたら話すわ」

和也は、首を振つた。彼は、とりあえず長いソファーに寝ることにした。暑いくらいなので、床にでも寝られそうだった。

日香里がさきにシャワーを使い、彼にも汗を流すよ

うにすすめた。

和也は浴室の扉のすぐ外にカメラバックを置き、そのうえに脱いだ衣類をかぶせて、浴室に入った。

シャワーを浴びていると、浴室の外で人の気配がする。日香里が彼の持ち物や、スラックスのポケットをさぐっているのだ。和也は、にやりとした。

ポケットに入れてあったフィルムは、玄關でスリッパに履き替えるとき、脱いだ革靴のなかに入れてあるのだ。目的を果たせなかった彼女は、どうするのだろうか。

浴室を出ると、思っていたとおり、日香里が言った。

「大野さん。あのフィルム、失くしていないか、確かめたほうがいいんじゃないの」

和也は、とぼけることに決めていた。

「いや、鞆に入れたのは覚えてるんだ。大丈夫だよ。

……さてと、もう二時半だ。ぼく、明日はいつも通りだから、七時にはここを出るよ。悪いけれど寝たいんだ。……ぼくちゃん、クタクタだ」

彼は毛布をかりると、下着姿のままソファで眠った。

夢のなかで、日香里が彼の傍らに置いてあるカメラバックをあけている場面が見えた。それから、どれだ

け時間が経っただろう。ねっとりとした舌の感触が、口のなかに生まれた。柔らかな手が彼の身体をなでます。それが股間につたわり、下腹部が硬直してきた。

また、あの夢か。まずい、また夢精をするぞ。眠いのだ。眼を覚ましたくない。我慢だ、我慢。しかし、快感がたかまり、いよいよ硬直してきた。息苦しく、それが奇妙に生々しい。突然、誰かがささやいた。

「フィルムはどこ？」和也は夢うつつから、目覚めた。日香里が肌をあらわにし、彼の下腹を愛撫している。「やめる。ちきしょう。落ち着いて眠らせろよ」

和也は、日香里を撥ねのけた。腕時計をみると、まだ四時半だ。

「バッグにフィルムはなかったじゃないの。嘘つきね。……だめよ、あなた。もう、このままじゃ、眠れないわよ。自分でわかるでしょう、あなたの気持ちに関係なく、ここが興奮しきっているわよ。フィルムをくれればいいのよ。そうすれば、天国に行かしてあげて。その後なら気持ちよく、ゆっくり眠れるのよ」

「わかった。フィルムは、ぼくの靴のなかだ。眠らせなくて。頼む……」

「いい人ね、大野さん。早くいらっしやいよ」

日香里の軀が白い花のように、床の上に開いていた。

彼は夢の映像そのままの、彼女のなかに吸いこまれていった。彼の禁欲計画はここで挫折したのだった。

☆

朝、和也が仕事の手始めの簡易印刷機の調整をしていると、成山専務が声をかけてきた。「昨日は、夜遅くなっただろうね。ご苦労さん」

「ええ、でも勉強になりました」

彼は曖昧に答えた。成山専務には、詳しいことを報告するわけにはいかない。日香里野にフィルムを渡し、てしまったいきさつを知られたら、叱られるに決まっている。うまい具合に成山も、郵政省関連のことに関心をしめそうとしなかった。

「それでは、配達が終わったら、寄り道しないで、早めに事務所に戻ってきてくれ。話がある。君には悪い話ではないと、思っているんだ」

「はあ、わかりました」和也は無感動に返事をした。

彼の頭には、朝まで日香里と無我夢中で過した、快樂の感触がまだ消えないでいた。フィルムは渡してしまったが、そのかわりに得たものの方が、価値が大きいうように思えたのだった。

日香里は、ミュージズ社の小根山社長との関係も教えてくれた。小根山は、いわゆる薔薇族で、芸能界入りしたばかりの少年を手なづけては、この家につれ込んでいるらしい。彼の出版する音楽放送の情報誌「ミュージズ」が、それを容易にする手段になっているのだ。その一方で、市販していない企業経営情報誌も手がけ、政治家や役人に情報ルートを持つている。その関係で「ミュージズ」には、一見無関係に見える企業の広告なども多いのであった。

日香里は、その人脈の開拓、確保のための接待役をさせられていた。小根山はまた、折にふれ彼女をつれて歩き、愛人であるかのように見せ、自分の少年愛癖を隠蔽していた。日香里は、歌手になりたくて、北海道から家出同然で上京し、公開サテライト放送を見物しているのを、小根山に誘われたのだった。

まだ右も左も分からないうちに、芸能プロダクションのコネクションをちらつかされ、小根山の仕事の片棒をかつがされているのだ。彼女は、小根山の魂胆を見抜いていながら、歌手になる夢を捨てきれずにいるようだ。

日香里の希みが、野望であるのか、夢なのか、現実の延長なのか、彼には見当もつかない。彼女の部屋の



絨毯、ソファ、ベッド、ステレオ装置にレコード棚。すべてが趣味的であった。生活のための生活でなく、趣味的な耽溺のための生活。日香里の肉体と手管もまた、快樂的で洗練されていた。とりあえずの欲望の処理と、生活の維持という即物的な欲求に迫られて暮らしている和也には、それが目新しかったのだ。

七月の下旬には、学校は夏休みに入る。しばらくの間でも、夜は彼女と過ごす時間が作れる。彼の頭は日香里のことで、いっぱいだった。日報の配達の間でも、いつものように本を開くことはない。眼を閉じては、彼女の肢体が与えてくれた快樂を思い浮かべていた。

だが、配達をすべて終わらせ、板橋駅前前の蕎麦屋に入り、昼食を取った後には、異様な興奮の余韻から醒めてきた。それが自分の生活範囲から逸脱した、一夜の珍奇な体験に過ぎないことに気づいた。

だいいち、日香里の洗練された肉体に触れていながら、彼女の精神にたいする情動がない。それどころか、その前の彼女の言動を思い起こすと、あしらわれたという屈辱感すら湧いてきた。もつと根性を据えて、彼女の攻撃をかわすべきだったのだ。せつかく成山に示唆された、試し撮りの結果も見られない。

ふと彼は、白い絹のブラウスにプリーツのある長めのスカートで登校してくる小山由利子の姿を思い浮かべた。会話をかわすだけの、肉体の存在感の薄い彼女との接触のほうが、まだ彼の心を慰めてくれる……。そのうちに、和也は異性のことばかりに執着し、欲望を抑えられない自分を意識し、自己嫌悪を感じた。いくら高尚な学問をしても、所詮は卑少な人間で俗物根性が抜けないのだ。……まだ蕎麦の残っている器の底を、割りばしで無意味にかきまわしながら、彼は妙に侘しい気分になっていった。

☆

午後、事務所に戻った和也を待ち受けていた成山は、彼を隣の喫茶店「ビアン」に誘った。成山は社員との個人的な話は、この店の予約席を使うのだった。

「じつは、いままで編集部にいた大野君が昨日で、会社を辞めたんだ。彼はW大学の文学部なんだが、婚約者の父親が文具店をやっていて、そちらの方の手伝いをするようになったらしい。そこで、君を社員にしたかどうか、と考えている。社員になれば、ボーナスがもらえるぞ」

大野といえば、和也が使わされている名刺の持ち主である。

「はあ、ポーナスは好きですけど、仕事が増えるんじゃないですか。学校へは、通えるんですかね」

「まあ、それは大丈夫だ。まず、日報の配達担当を変更して、白山上と板橋はやらなくていい。有楽町の東都電気と大森のフロンティア・オーディオの二ヶ所にする。それで空いた時間を、印刷所へ行って記事校正したり、新製品の発表会に出席したりする。そのうちに、紙面の割付けも覚えてもらう。それでどうだね」

フロンティアの名が出たので、和也はその田淵広報課長に、靴をもらった話をした。

「ぼくの古い靴が、みすぼらしいんで、成山専務が田淵課長に頼んで仕組んだことかも、思いましたよ」

「君の靴のことは、気にしていたが、まさか、そこまではしない」

成山は苦笑して見せた。そして、たしかに和也の靴のひどさは、東都電気の広報担当者も成山に話題にしたそうである。雨の日などは、和也が配達にいくと、靴から水がしたり落ちて、きれいに磨いた廊下に、足跡をつけるし、翌日も同じ靴なので印象に残っているのだという。

「得意先に、強い印象を与えたなら、結構じゃないか。世間じゃ、アイビー・ルックだとかなんとか騒いでいるなかで、なかなか偉いつて、その東都電気の人も感心していたな……。それから、田淵課長が、君に靴をくれたのは、君に対する期待もあるんだらう。正直言くと、君を正社員として記者にすることにしたのは、田淵課長の相談を受けて、その対応策でもあるんだ」

「はあ？ それはどういうことですか……」

成山の説明によると、フロンティアの田淵課長は、いままで大手の一般新聞や、経済新聞で取り上げられた、自分の会社の記事の内容の浅さに不満を持っているのだという。

そこでまず彼は、自社の広告を出している業界新聞に、きちんとした実態を把握した記事を書かせ、それを一般新聞の記者に読ませ、対抗心をもたせたうえで、専門知識を勉強するように、仕向けることを考えたらしい。

フロンティア・オーディオという会社は、もともとは音のよいスピーカー単体を作っており、そこからステレオセットの製造販売に進出したメーカーであった。ところが一般には、ステレオセットは家電品の一部という考えしかない。オーディオという言葉も、フロン

ティアがアメリカの市場を開拓した経験から国内で使用しはじめた用語であった。

「田淵課長はだね、家電製品の販売店が、まだオーディオ関連商品が文化的な産業として、もつと成長する分野だということに、認識が足りないのを問題視しているのだ。そこで、彼の会社の思想にそった記事の書ける記者が欲しいのだ。手始めに、業界新聞で専門知識のある記者を見つけようと、彼は自分が広告を出している新聞社の事務所を訪問視察しているんだ」

「ずいぶん意欲的なひとですね。わざわざ、事務所を見に来るなんて」

「おそらく、社長の特命で動いているんだらうな。わが社も彼の意向に従えば広告が増やしてもらえるなら、と実はあの大野君をフロンティアの専門記者にすると、彼に約束してたんだ。ところが大野君は、電気知識がなくて、田淵課長は気に入らなかつたんだ。広告は増やしてもらっているのにさ。大野君が辞めるとなつたら、田淵課長が、君をしばらく広報室に、通わせろと指名してきたのだ。アルバイトだからと断つたら、社員にしろ、そのくらいの経費分ぐらひは、広告を増やしてくれるというのだ」

和也は、以前は電子計測機の組立工をしていたので、

ラジオやステレオのキットの組立てぐらひは出来た。文学青年の大野より、電氣的知識があるのは確かだった。

だが、彼が田淵課長に会つたのは、ついこの間である。なぜ、自分を……？

和也の不審そうな顔をみて成山が言った。

「きみは歌手のマット・モンローの会見を、ぼくに言われて記事にしただろう。デスクに置いて帰つたな。あの後、戻ってきたところ、田淵課長から連絡があり、会社に来て来た。そのとき、わたしの机のそれを眼にして、この原稿を書いたのは誰か、と言ひ出したんだ」

田淵課長は、出来合いのプレスリリースをそのまま写さず、なんとか独自色を盛り込もうとする彼の努力の跡を評価したのだという。

「彼は、愚痴るんだよ。ほかの業界新聞は、広告もらつておいて、彼の要望に応えようとしないうてね。

専任の記者をだしたのは、たとえ大野君でも、とにかく、わが社だけだったらしいぞ。彼も困っているらしいな。ほかの業界新聞は、年寄りばかりで、そんな人材は居ないというのが、わかつてね。それで、無理にでも、君を専任という形にしておきたいのだ。そうで

ないと、彼も社内的に顔が立たない」

「形はどうあれ、身分も収入も安定するのなら、ありがたいです」

「なにしろわが社の広告収入に寄与するんだから、それなりの待遇はするよ。きみの名刺も頼みである。週に一回、彼のところに出来上がった新聞をもって、顔をだしてくれ。それで、対外的には最初から社員であったということにする。で、これは、夏の酒肴料だ」

成山は、五千円の入った封筒をくれた。そして、こう言った。

「自分で気がついていないらしいが、いまの君にはツキがあるよ。ぼくには、わかるんだ。いままで、仕事をもらう心配があつても、端緒がつかめなかつたものが、君の登場で動きだした。そのツキを買おう。これでフロンティアに食い込めそうだ。」

「はあ、そうですか。今迄そういうことが重要とは思つてもいなかつたです」

和也は、成山の提案を受け入れることにして、話し合いを終えた。アルバイト待遇では、月に一万八千円だが、社員になれば、月給制で二万五千円。残業手当はないが、もし風邪などで二、三日休んでも、日当のように減らされることはないという。おまけにボーナ

スが貰えるとなれば、和也からすれば、破格の厚遇であつた。

☆

その夜の時間割は「法学」である。二十時半から開始の三時限目の授業だけ。問題はその日はそれだけしかないことだ。これは、単位取得ための必須科目である。受講生の数が多いので、教室は大講堂である。しかし、受講生は数えるほどしかない。おそらく土曜日のせいであろう。夜間生は、この授業一科目だけのために、夜の八時半から登校してこなければならぬ。

ところが、この「法学」の授業科目は、夜間部も昼間部向けと同じ教師で、同じ内容である。昼間部の授業は午後三時から始まる。

夜間部の学生で、昼間働いていない者は、そつちの授業を受けてしまうのである。教師は昔から変わらぬ授業を、毎年テープレコーダーを使ったように繰り返しているだけだから、それでも支障はなかつた。土曜の夜の九時過ぎまでの受講は誰だつて避けたいに決まつている。

☆

家に帰ったのは、十一時を過ぎていた。昨日は帰宅しなかったが、和也にはよくあることだった。家には両親と姉がいるが、母親は神経症による強い不定愁訴で入院していた。

彼が帰ったのを気配で察知したらしく、父親が奥の部屋から、のこのこと出てきた。

「お前、今月は仕事にありついたらんדרו。家に金を入れろ」

「まだ、正式に給料をもらっていないんだ」

「おつかアの入院費がかかるんだ、姉ちゃんだって、働いた金をいくらか入れている。お前も、学校なんか止めて、きちんと働いたらどうだ」

和也は、成山からもらった五千円を渡した。

「そのうちに、もつと出せるようになるよ。学校に通いながらだって、一人前に稼げるようになったんだ」  
彼は、居間の隅にある梯子を使って、中二階に上った。そこが、彼の勉強部屋兼寝場所である。

中二階といつても、そこは天井裏を改造したものだ。

家は居間と奥の間と、この中二階の三部屋しかない。鳶職人の父親が、戦後まもなくここに借地して、バラックを建てた。最近になって父親は、借地を買い取っ

た。それで蓄えがなくなり、生活が楽ではないのだった。

☆

屋根の梁が露出した中二階は、昼間の熱気が残っていた。彼は、顔だけが出せるほどの小さな窓を開けた。家は大森海岸のはずれにある。近くのガスタンクの黒い影の上で、航空機への赤い警告表示灯が点滅しているのがみえた。空には星がまたたいている。梅雨はもう明けたのだろう。和也は、部屋の隅に畳んであった布団を引き延ばす。小旅行でもしてきたように、疲れがどつと出てきた。ひとまず、そこに横になった。

彼は、週刊家電社に勤めだしてから、状況が良くなってきているのを感じていた。成山が、ツギがあるといったのは本当かも知れない。電子機器の組立工をしていた頃は、毎日同じ仕事をし、自分のところだけ時間が止まっているような気分が、漠然とした不安をかかえていた。

それなのに周囲の人々は時間と共に、どんどん前進していくのだ。行き止りに居て、時間に追い越される自分。このまま歳だけをとってしまおうのか。

たとえ、仕事仲間に囲まれ、歓楽街で遊んで帰っても、寝る前の空虚感が彼を悩ましたものだ。

それがしかし、今はどうだろう。時間と共に自分が歩んでいるのを感じるができる。大学での知識の吸収と累積がそれを証明している。

資本論研究会ゼミナールの教授に、マルクスの資本論の中に示された、英国経済の統計数字が、理論とあつていないという実証をしたノートを見せた。

それは経済恐慌前の国民総生産量を、百とすると、それが恐慌によって、一時的に七〇から八〇に縮小するが、それも一、二年のことで、数年もすれば恐慌前を上回る経済規模に拡大し、それからまた恐慌がおきる。

しかし、その地点では、前回の恐慌時よりも国の経済規模が大きくなっており、前回より経済成長をした百よりも大きい規模での不景気状態なのであつた。

それを資本論では、恐慌のたびに経済規模が縮小していくので、国民は不況に追い詰められるというニュアンスは示されている。

もし、資本論を修正し、正しく理論立てれば、ケインズやガルブレイスなどの近代経済学と対等なり理論

構築ができる、というものだ。

それを読んで、ゼミナールの教授は「面白いな」と評価した。

資本論のその点は多くの学者が指摘しているという。「それでも、論点のスポットの当て方に時代性がある。君は大学院に進んで勉強すれば、雑誌にマルクス思想の社会評論を書けるようになるよ」と言つたのだ。

そうはいっても、和也に大学院に進む余裕はない。当面は、新聞記者としての仕事の道を拓くのが、いちばん現実的だ。道……。そうだ、いま自分は、道を歩いている。行先はわからないが行き止まりでない道に出たのだ。なにかに成る途上にいるのだ。あの工場での組立工をしていた頃の、大げさに言えば、このままでは死んでも死にきれないとまで思った空虚感、ここにはない。ただ、一日を終えた充実感だけがある。彼は満ち足りた気持で、着替えもせずそのまま眠りに吸いこまれていった。

☆

その後、職場の安定した彼は、小山由利子と本格的な交際を持つと努力したが、彼女にそれを断わられ

てしまった。

彼女は昼間部へ転部した。由利子は、和也に社会主義運動について学ぼうとしたのは、若林から受けた屈辱が忘れられず、できたら彼の革命思想を否定する根拠を学びたかったからだと打ち明けた。

若林は事あるごとに、和也のことを知識だけで行動のできない、プチブル思考の反革命的人間の典型であると、由利子に説明していたようだ。

彼女は、そんな若林の非難を、平然と受け流し、逆に冷やややかに若林を眺めているような、和也の思想的態度が自分に欲しかったのだ、という。

和也はそれを聞かされて、早くそれを言えばよかったのに、と苦笑した。彼にとって革命運動家とは、金を産み出そうとして、次々と別の副産物を造りだしてしまう錬金術師に思えるというのである。

また、革命は永続的なエネルギーを前提としている以上、若林の志は道半ばで終る可能性が強い。しかし、だからといって、由利子が無意識に希むように、それが彼にとって不幸であるとは限らない。彼のような人間には、常に自らの志に向かう途上であるという、ある種の幸福感がつきまとうであろうから……とも言った。

おわりに、途上の幸福というものは、彼らだけの得られる特権ではない。この自分にも、ささやかながら、それがあると語った。

そこで和也は、自分が日報の配達をしていたコーラルトンという会社の一人の男の話をした。

会社の広報室のTという男が、いつも彼の届ける日報を受け取っていた。彼は、和也が夜間大学生だということ、成山から教えられていた。Tは、和也が突如の雨で濡れているのを見てから、いつも和也のために傘を用意していてくれた。

Tは高卒で、大学に行きたかったが、事情でそれが許されないのだ、と和也に語った。Tは和也と同年だということもわかった。そのTがある時から姿を見せなくなった。Tはある日突然、脳に細菌が侵入し急死していたのだった。和也は、ショックを受けた。人生に死は突然やって来るといふ現実を実感した。

その時、彼は思った。たとえ、自分に避けられがたい死が訪れたとしても、学ぶ志の途上であるならば、そうでない場合に比べ、論理的な慰めがある。いまの自分には以前より、ささやかな途上の幸福があると……。

この時期、対米戦争の敗戦で、激減していた日本人の人口が、戦前を上回り、一億人に到達したのであった。経済成長は、人間の増加が大きく寄与する。この人口増加は、日本を世界有数の経済大国にするであろう。和也はそれを語った。

由利子は、ある部分では満足感をあらわし、ある部分では不満をもちた。そして、彼にこれまでの交際に感謝の言葉をのべて、去っていった。

☆

それからの彼は、週刊家電社に勤めながら、無事に卒業を果たした。

卒業式の前に、大学の近くの大衆料理屋で、同級生の迫い出しコンパが行われた。入学の時点で、五十名の生徒がいたのであったが、コンパに参加したのは、三十名ほどであった。さらにそのなかで、その年にたしか卒業の資格を得ていた者は、二十五名にも足りなかったということであった。

とはいうものの、留年生組も卒業生組も、それぞれ夢を抱いて、一億分の一の途上の幸福にすることを、和也は信じていなかった。

【了】